

復興と市民団体—市民セクターの在り方とは—
—住民重視の復興に向けて人間の顔が見える活動を—
政府行政、民間企業を監視し、対等関係を維持する

東日本国際大学経済情報学部准教授

山田 紀浩

3.11 東日本大震災は、岩手・宮城・福島県を含めた東日本地域はもちろん、私たちいわき市民にも物質的・精神的に甚大な被害を及ぼした。今でこそ復興途中にあるが、震災時を思い起こすと現実を疑いたくなる状況であった。建物やインフラを含んだ街の様相、全半壊を含み傷ついた我が家と先祖代々の墓、それに川の河口や土手など自然のいたる所、また応援で駆けつけた他県の警察・行政車両や自衛隊が往来する模様などは、まさに通常時の姿ではなかった。そしてこの震災によりいわき市民の誰もが、我知らず、精神的な痛みを抱えてしまった。親兄弟を含んだ親戚、ご近所、学校や職場での同僚などで、近くの誰かが、大切な人を亡くし、あるいは職や財産を失った痛みを抱えている。子供ですら避難所はどこで、遺体安置所の場所が分かり、それらを目にしていた。

夏季休暇中に学会で東京に行って来た時、3.11 の時は東京でもマンションがグラグラ揺れてびっくりしたという話を友人から聞いて帰ってきた。でもどこか違った。今でこそ私もいわきで普通に生活しているつもりでいたが、友人は本当に普通に生活していた。もちろん、普通に生活すべきであり、でなければ困り、それを羨むものでもない。そして普通の生活の中にも個々人の悩みや苦しみはある。しかしいわき人が抱えた二重の痛みは感じられなかった

と思う。否、その会話の中で、3.11 を境にいわき人が抱えた重いものをはっきり確認してしまった。

3.11 東日本大震災は、千年に一度といわれる地震と津波という大震災といわれている。しかし本当に千年に一度の震災だったのだろうか。千年前の震災は、大地震と大津波だけであつた。今回の震災は、高度に発展した現代社会であるが故の負の災害をも誘発させてしまった。まさしく現代の科学技術の粋を結集させたはずの原発事故も重なり、我々人類が歴史上経験したことがなかった大地震・大津波・放射能汚染という三重苦による大災害となつてしまった。ここからの復興は、まさに歴史的な復興である。そして福島原発を抱えた浜通りの中心地はいわきであり、歴史的復興の中心も当然いわきからならねばならない。

現在、政府は復旧復興に全力を傾けており、地震・津波に対する作業は、これまでの災害経験から対応している。しかし原発問題の対処に関しては、政府も迷走し、東電も迷走し、国民も迷っているのが実情である。政府の行動形態の社会科学的解釈では、一応、公平・平等・正義を求める(今回のスピーディの隠蔽などそうとは思えないが)。東電は民間企業であるが、民間企業の行動形態は、利益追求である。民間企業の営利追求は当然のことであり、経済活性化のためにどんどん努力してほしい。しかし今回の事故ではどうだったのか。当然、政府行政は東電に対するチェック機能を働かせねばならないが、その場合のネックになるべき原子力保安委員会は東電の巣窟だという。これではチェックどころか官民癒着構造が成立し、今回の事故対処にその姿がまさに露呈した格好だ。政府がチェック機能を果たせなければどこがするのか。我々は多忙な日々の中で、税金を納め、そうした仕事を政府行政に任せきりである。怒りが当然起きる。

これを打破するためには、政府行政セクターと民間企業セクターを監視し対等関係を維持できる市民セクターの台頭が不可欠である。しかしエリート集団と歴史を兼ねたこれら 2 セ

クターに対抗する市民セクターを形成させるのは容易なことではない。当然時間がかかる。しかしその必要性は痛感する。では何をどうしたら良いのか。社会の基台である人間を成長させることは当然だが、社会はその人間たちが集まって形成されている。人間に個性があるように、市民団体も多種多様である。それが、政府行政セクターと民間企業セクターと肩を並べられる市民セクターへと繋がってほしいが道程は容易でない。しかし住民重視の復興には人間の顔が見える活動をする市民セクターが必要である。いわきの復興は、まさに歴史的な復興である。その主人公はいわき人である。我々はすでに3セクターのいずれかに何らかの形で関わっている。セクター内の努力は勿論であるが、セクター間の相互依存関係を形成させた社会制度のもとでの復興に、微力でも繋げていきたい。